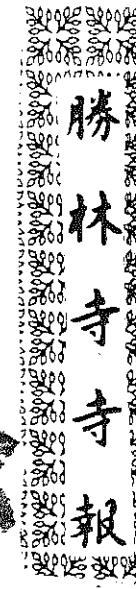


勝林寺寺報



生きている以上、歳が寄れば寄つたで、心配があつたり不安がおこつたり、未練の思ひがのこつたり。悲しいこと、つらい病もまぬがれられません。

しかし私の

超世の悲願ききしより

われらは生死の凡夫かわ

有漏の穢身はかわらねど

こころは淨土にあそぶなり

源左さんのこと

聞いて思ったこと (70歳)

因幡国というのは今の鳥取県です。

山根村に足利源左というおじいさんが住んでおりました。

若い時分からよく願正寺というお寺にお参りして如来様のおしえを聞いておりました。

なくなつたのがまだ今から7・80年前です

からそんなに古いかたではありません。

如来様のお慈悲のなかで毎日毎日よろこん

で働くかたでありましたが、その源左さんも

八十九歳になり老衰がくわわって臨終が近づいたころのことです。

お友達に山名直次という老人がいました。

この人は源左さんと大の仲良しでしたが、この人もまた年老いて長く床に就いておりまし

た。

彼は、いよいよ自分が死んでいくとなると、

いろいろ不安の思いが生まれてきて、これで

娘を使いに出て、源左さんに教えを乞いま

した。

源左さんもそのとき同じように死の床に就いていましたが、使いの孫娘に向かつて、こ

の「直次さん。此のまま死んで行きさえすり

やー。親さま如来さまのおいのちのなかだケ

エノー。こっちは持ち前通りに死んでいきや

ーええだいノー。ヨウコソヨウコソ。南無阿

弥陀仏。」

そうして源左さんはまもなくなりました。直次さんもまたその翌日、安らかに死をむかえましたと申します。

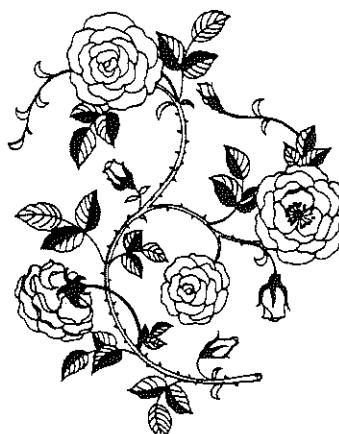
寺の報恩講さん

十一月二十一・二十二日はわが寺、勝林

寺さまの報恩講がありました。

私は、前から仏社の役員と言うことになつてはいましたが、退職し暇になつた三年前

からまづまづ曲がりなりではあります、本格的な勤めができるようになりました。



二日ながら大勢のお参りでした。ほかの檀家の人も何人か参つてくれていますた(一部は連研の人達だったそうです)。お斎の人数だけでも四十五人・五十人だったと聞きました。

内田先生の親切なしかも理路整然としたご法話も二日ながら聞くことができました。

私の独断と偏見で整理して見ました。全くの曲解に違ひありませんが…。

思議の世界(見たり考えたり計つたり比較したり競争したりの世界)

不思議の世界(見えないけれどもあるん

だよ。心の世界。だれもが通じあえる世界)

(魂の世界、靈魂の世界などもここにはい

るのかナ)

不可思議な世界(考えたり思つたりを拒

否した世界。自己中心な思いはいけない、

こさかしい計らいはやめとけ。如来様は智

慧の光で人間の思議をつぶしてしまわれる)

十一月のことよみ

一日 朗読ボランティア総括会議
二日 唐川報恩講
三日 太田・東里報恩講
四日 布教使育成研修会(別院)
五日 奥小谷報恩講
六日 幼稚園餅つき
七日 合同役員会
八日 保谷・日殿報恩講
九日 市場報恩講
十日 日高町役場
十一日 八鹿小田報恩講
十二日 八鹿小田報恩講
十三日 丸中・片間報恩講
十四日 野尻・矢根報恩講
十五日 丸中・片間報恩講
十六日 百合・桐野・寺坂・日野辺報恩講
十七日 口小谷報恩講
十八日 矢根法億項
十九日 検診
二十日 青年僧侶の会研修会(別院)
二十一日 豊岡・鉢山報恩講
二十二日 出石組住職会
二十四日 出石町役場
二十六日 みのりを聞く会
二十七日 お餅つき



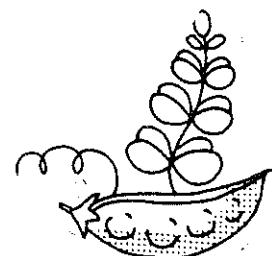
付きました。

奮つて
除夜会
十一時より雑煮の接待を致します。

ご参加ください



同体の慈悲



わたしには十三歳もちがう姉がいました、これが親代わりとなつて私を育ててくれたのです。

父は戦死、母も戦後の耐乏生活のなかで昭和二十三年の春に亡くなつて仕舞いました。

私はそのとき二歳か三歳。別に悲惨とも苦労ともわかるはずもありません。それからわ祖母がいたにはいたのですが、それからわたしは姉の手ひとつで育てられたようなものであります。

その姉も私が大学出て町役場に勤め始めて3年目に病で亡くなつて仕舞いました。結婚もしないまま私の家で亡くなつて仕舞いました。

あれは小学校5・6年生の頃でした。

大川端の堤(つつみ)で一人して、真っ赤な夕日の中に立っていました。

そのとき姉がつぶやくように言つた言葉を忘れません。

「つらいことも、苦しいことも、いやなことも何もかも、お日様はみんな赤一色に包み込んでくださる。汚れたこころも、憎しみも、欲な根性もみんなみんな赤一色のなかに抱き取つてくださる。ああこれがみほとけ様なのねえ。」

と言つて姉はさめざめと泣きました。

貧乏のなかで、何もわからん弟を育てるには、また特別にも若い女としての苦しみ悩みがいっぱいあつたに違いありません。

その醜い自分が、夕日に照らし出されてしまうとき一挙に見えてきたに違いありません。それをなさっているお方から聞きました。

姉のことを、昔姉と小学校で同級生だったというお寺のお坊さんで福祉センターの役員をなさいました。

「お姉さん今いたら、絶対に福祉センターの心配事相談か、人権相談の主席にでも座つてもいいたいねー。あれ、苦労人っ言うんだねー。どんな凶悪な犯人とも話ができるんだから。どんな奴とでも同じになつて、『そーうーわたしもおんなじだもん』なんて、いつしょになつて悩んだり悲しんだり!。そのうちにその人、いつの間にかいい人に生まれ変わつて仕舞うんだ。一緒に悩んで一緒に生まれ変わつて。」

絶対にお説教なんかしなかつたねー。」

赤い夕日の光の中で、自分の罪や汚れを見たいま私は、夕日の中の姉を思い出します。

姉は、どんなに汚いものでも、恐ろしいものでも、人事でなく、自分のこととして感じて、共に一緒に悩もうねつてー。亡くなつた今でも、姉は、私と一緒に悩んだり悲しんだり:

福社センターのその方は「同体の慈悲」ということばを教えてくれました。
同じ身になつて呻き悲しむ、それが仏教のこころなのだそうです。

と申しますのは、一昨年里の法事に帰ったとき、老院さまのお説教で教えてもらつた「ことばの魔術」です。

「いい言葉は、なるべくつとめて使うようになります。ことにこの「ありがとう」という言葉は、仏教から出た言葉。出会いの不思議さを喜ぶ言葉です。貴方と出会えたといふことはなんともいえん不思議なご縁。このご縁を大切に……ということです。親鸞様もそのお書物の書き出しに「ああなんと、如来さまの強い慈悲の中で不思議にもこうして出会えた」ということは千年万年にも恵まれることではない」と。有り難う有り難うと歓喜のこえを挙げていらっしゃる。

ウソでもいい、なんでもいい、この素晴らしさのことばを使ってごらん。本当に出会いのよろこびが感じられて来るから。

あれから私、家のなかでもそとへ出ても、思い出してはこの「有り難う」を使ってみました。高一の孫娘が昨日夕食のとき「おじいちゃん、このごろ、ぐーっと明るく和やかになつてきたねー」ってひやかすんですよ。おおいに照れながら「あー、老院さまのあ

京都西陣老



のご託宣、うそではなかつたんや」と思いました。気がついてみると、私の使う「ありがとう」を家のなかの子や孫も互いに言い交わしていますし、実際、人ととの出会いが大切に大切に思えるようになっております。

七〇も過ぎてから、わたしはじめて尊いものを得させていただきました。

老院さまのおかけ

なぜかわからんなりに昨日はお仏壇にお灯明をともし、やっぽりここでも「ありがとうございました」とお札を申し上げました。

この拙い手紙、どうぞ寺報に乗せていただき、誰にもかれにもお伝えしたいことです。

